

ミカヤの老



林化瑞画

薰發の卷

一 聖 經
 四 聖經の友
 六 目的と方便
 八 説 法
 九 影 映
 一〇 色 心
 一一 感應同交
 一四 法種薰發
 一七 (無題)



御遺文

聖 經

此の聖教によりて信を建て願を發し行を起すものは安心起行して彼の妙果を期す。願とは所求なり信は所歸所求と所歸と去行を思ひ定むるを安心と云ふ。所求とは初厭世間の人を見るに茫茫として塵境に在り唯肉欲の奴隸名利の眷屬となりて不淨苦無常無我の中に於て顛倒して常樂我淨と想へり。生涯たゞ顛倒夢想のためにまどふてむなしく竟るべきものを佛おはれみ此經を説たまひて真理にかなふところの求る處をしめしたまふ。

夢まぼろしの中に榮を求め朝露電光の中權威を望み名利の眷屬となり肉慾の奴隸となりあわれむべき生涯を果すべかりしを、聖經は我らに最も大なる福をあたへ、またかぎりなき光榮をたまふ。即ち三界に超出せるかの蓮華藏界の依正莊嚴を説て我らに欣求のこゝろを發さしめ、三界の火宅を出で四(一)莊嚴の寶處に到らしめ、かの國

に生るれば生死を經ずして一生補處にいたり乃ち佛果を得んことまた喜しきにあらずや。

所歸とは我ら罪惡生死の凡夫曠劫よりこのかた流轉して出離の縁なかりしものを、かのあみだ佛四十八願を以て我らを攝受したまふ。經にあみだ佛を説くをききて、我らは無始よりこのかた無明のやみふかく吾我の執つよくして見思の惑のため業を起し生死の苦を受くること畔漚なくして、常に没し常に流轉すべきものをあはれみて、かの佛因中に大誓願を發して竟にかの報土を成じ本願成就して、今現にかの淨土に在し光明盡十方國を照し、念佛の衆生をもとめたまふ。若しかの佛の大願業力の増長縁によらずんば、盡大地微塵の劫を經とも竟に出離あるべからざりしを、最もたのもしきかな我らかの佛に歸命せば至心に信樂して回願すれば、ほとけは大願力等の三念力を以て我らを攝受したまふ。まことにたのもしきにあらずや。去行とは經に名號を執持すること一心不亂と。少善根福德の因縁を以てかの國に生ずることを得べからず。

導師云く隨縁の雜善にては恐らくは生じがたく如來をして要法を選んで専らにして亦専らならしむ。元祖云く、若しは一日とは細に云はゞ若しは一聲乃至一形なるべし一心に専らみだの名號を念す。

正因、安心起行已に同じ、妙果何を夫れ異なるべけん。まことに教の友はたのもしきにあらずや。此經を受持し書寫し讀誦し解説し如説に修行するものをみな友となづく。讀、清かなる晨、しづかなる夜に、攝心して音を清朗にして誦誦するときは、自ら心は淨き國の樂しきみ園に逍遙として遊ぶの想ひあるべし。

常に心をかけてよむときは、つひにはよむことが樂しくなるべし。因に淨土をたのしむ、妙果焉を得ざらん。一たび心を注めてよむときは心は淨國の樂にめぐり遊ぶなり。この心がつひに淨土にゆくなるべし。

經は常たる經なれば、この經をよむ思は淨土にゆくみちなり。串習久しく終に性を

三

なすものなれば、淨土を樂しむ性には成はぬべし。

聖經の友

こゝかしこ身はへたつともちきりてし心は經の園にあそばむ御經よむ聲に心もさそはれて樂しき園をめぐりあそばむ法の緒を心のたまにつらぬきてまことの友はたのもしきけれこのみ經よむたひごとにおもふかなちぎし友のふかきまことを子をおもふ親のこゝろをしれよとて御經のたより聞くぞうれしきながき夜のねむりもやがてさめぬべしあかつきがたによめるみふみによそごとにきよしつらんかの國をわか故郷とまだ知らぬ身はよみかはすこの法の音ゆく末の心にのこすかたみとはせよ

衆會讚經

きよきあしたしづけき夜によむ聲に心にしにすみわたるかないつよりかみだれそめけむしら糸の(へ)るかひもなき我身なりけりくらきよりくらきにまよふ人のためてらすは法の光りなりけりまよひぬる子のためにぞと枝折せる親のこゝろを知る人もがな

結 婚

後の世をかけてぞちぎる妹とせのこゝろにむすぶ法の糸もてこひしくばみ名をよべかしみ佛のひかりの中に我も住みせば

厭 欣

浮雲の世をいとふなり久方のみそらの月のみまくほしさに御ふみよみて樂しき國をおもほへば浮世のなかをわすれけるかななにごともしないたづらの世の中になどかはらぬはあみだほとけぞ

五

くる、日を山のあなたにあふぎつゝたえぬひかりの國はわすれじ
魔のさとにころなとめそ六のみちはしもしらぬむかし（）りて
へめぐりてどこものどけきところなしきくものはたゝかなしみの聲

目的と方便

佛教は流轉還滅の二門を以て示すに流轉の甚過ぎることを切に教へ知らしめ之を棄厭せしめて還滅によりて本元に還歸することを悟らしむ。本元に歸せざれば微塵劫を經ても生死を脱すること能はず。此流轉の過りなることを説て之を厭はしむるは方便にて專心に還滅に向はしめるは目的なり。今淨教の如くば厭欣の二心を以て惣安心とし、六道生死たる三界は虚假の處無窮等不實の中に於て自ら感ふて實有とす。是の如くの生死は畢竟にして虚妄なり凡夫認めて實と謂へり。是惑の甚しきなり知者之を棄厭せよ。彼の不虛の處不無窮の處なる淨土に生じて、この夢さめて眞如の實境に入ればよ。

本來吾人が實在と謂ふものは皆是幻化の境にして、畢竟空なるものなり。此の中に於て惑が故に實有と謂へり。爲に實際善惡なき中に於て迷の中に善惡の業を起し此迷の中の善惡の妄業によりて虚妄なる苦樂の幻境に無實の苦樂を實に苦なり實に樂なりと計す。是の六道生死は自己の惑より感ず。慧眼の中に六道流轉あることなれども衆生自ら妄に夢の中に浮沈すれば爲に之が厭ふべきことを教へしは、完く止を得ざるの事實なり。佛教は此の輪廻説を以て目的とするにあらざして不輪廻の實境に入らしむるまでの方便なり。此の六道輪廻は衆生の關係上理數の免れざる處なり。佛は先づしばらく置いて吾人が實踐理性の請求の因果律を以て是を假定するにあらざるよりは如何がしてこの衆生が生涯に愛取以て有する處の業力の歸する處を得ん。依つて今しばらく六道輪廻の説の起縁せる所を論じて、公平なる因果律の歸する處を説明せんと欲す。

衆生知情意の三及三業善惡によりて善惡共に上中下三品あり六道を作る。
然れども此の輪廻説を以て決してこの中に於て惡を棄て善をすゝめ人天の果報を受しむ如くは佛の本意にあらざるなり。六道輪廻は迷の中の因果律免るゝを得ざるより説示したるものの、これを出離して不輪廻の處に歸せしむるが目的なり。目的什麼にあることを謀らずして棄てしむる處の方便の方に於て科學及實驗上輪廻の證なしと謀々として言論を費やして其目的なる吾人が精神を絶對なる智福の妙境に稱はしむるの妙法に於ては未だ曾て夢だも見、その想像さへもいだくこと能はざるべし。世に云ふ實驗と謂ふは其實什麼の邊にか有る。

(説法)

自信し得たる得とは心にたしかに信心已に充ち溢りて發して能化の説く法の玉は所彼の機心のうちにこむなり。能く萬機に投するあらば、一丸の以て、今までの我執を斃して毒氣うしなひ復活して法の王子となるべし。

自ら諸信の處だになくいかほど辯を費ともカラ鐵砲では彼が我執を斃して彌陀法王に歸化する民とはならぬぞかし。

影映

佛。法身空間に遍し、大圓鏡的然映徹、能照已清、能向の衆生未だ罪垢に覆はれて其の心の影像を映現せしむること能はず、若し衆生垢障已に除きぬれば、大虚の大圓鏡中に其歸向する處の信及念、念とは佛を戀念する故に身相其中に映現す。

智とは三智等なり所謂の中論の因縁所生法我説即空假即中道義
天臺玄義釋妙なり。

(色心)

腦(精神の府 扶根 勝義根)
神識 識 城廓

因因腦漿は識と一にして二所縁の境六をうつして受其色聲等の影像名言等を想ひとり、これは何物なりやと作意して思了かに何々なりと別けて識る。

腦の生得の構造等の別々なる

相濟同性敏鈍體大小力多多少少作用巧拙なる本因に生得として異なるべし。

外縁の薰習修練によりて其果は大なる差別をなすべし、性相近、習相遠。

腦漿を澄ましむるには禪定の法によつて數息等よりするもよし。

腦漿中に一塵もをかすして氣を丹田にとどむべし。

腦裡一物色等をも置く時は(色聲等に就て食等を想ふ)蓋となる。氣血とどむる故に腦漿をして澄澄ならしめす。

(感應同交)

人形氣の精あり 男女愛欲情に屬する欲は形氣の欲中最も重きものにして是生死の根本また形體資續を作すの天法にして、人體機關完ふするもの具せざるものなし。

世曰く男女形氣の諸相交て嬉むは猶植物の花の咲たる如しと。華しへの氣をうけて實を結ぶの因縁なすが如し、精虫の種子卵築に注いで相合して胎をなす。

人の大脳に思想を主宰する神あり、思想百般は悉く之か命をうけざるなし。

此大脳神は此形氣を支配し百般の理事に通じて受想行識休息することなきが如きは悉く六塵分別の影像の爲の事業なれども、此神が深宮の中にありて如何なる事實の中に於て最大の事として精の相交て開花の快美の如くがある、孔子曰く賢レ々交レ色。佛教盛にこの事を教へて勸めて衆生をして法種をう江道器を成せしめんとす。

一心念佛三昧の中に入る時は心王宮出入の門をとちて、一心正而西向して、佛陀日

10

輪に對し、欲樂し、欣慕し、彼の美人を見んと欲し、戀慕日夜にやまず、寤寐之を思つて失意瞋盲痴人の如し。心華開て相好微妙なることを見る。時に身心融液不可思議なり。微妙、感應同交不可思議、歡喜言語道斷、自知、知解を絶す。

此妙境不可思議、三昧無爲即涅槃。

ゴウタマ皇子出家入道三十歳、臘月八日曉、廓然大悟、入佛華嚴三昧中、舍那圓滿月十地等覺根本無明の雲の中よりあらはれ塵沙妙相皎々。

○

一、因縁相離れて云何が修行の進むべきあらん。

内因空にして外縁空を觀するも空を緣するにあらずや。緣生にて本空なるを觀するは、修行功久ふして腦水漸く澄湛にして一塵もなく、少の動波なく、時に腦本性の眞面目あらはる。無意無念にして自然に法界の空眞を緣す。譬へばすみ湛へたる水中に空天をうつすが如く無念にして交通す。

禪家に初心に一の公案を授けて工夫せしむるは腦裡に名言の緣をかりて一心に工夫を凝しめて終に豁然と貫通するは腦脈を折判せしむるの方なり。然れども名言の上に泥滯して理會了解を求むればたとひ數年の苦をなすとも空く妄念を増すのみ。一物をかりて腦脈を判決して通ぜしむれば腦をよく成らしめて心のはたらきをよくせしむべし。よく分判すれば應用無礙なり。爾らざれば心が境に對して通曉することかたし。若し法界の中の佛境界を緣じて心境自在ならしめんと欲せば念佛三昧に若くものなし。行者の腦脈を判んと欲せば能念の心腦所念の阿彌陀佛眞金色なるを念す。

大來佛教は概して三摩地の境にして即ち能く心想鍛練により開きたる華の色香莊嚴の境なり。

問。淨土自己の心中にあり何ぞ遠く十萬億土に求むるや。

答。汝此肉眼を以て靜夜空中に列せる星宿を觀よ。かの無數の星の數類はこの眼識界

11

に攝するにあらずや。彼星宿、恒星惑星の如き何れも太陽及地球等の類屬なるべし。この拙劣なる扶根を藉る眼界已に無數の刹を容る。況や心性の無邊なる何ぞ十萬億土及六方各恒沙の刹を心中に攝せざらんや。汝十萬億土の距離を疑ふこと心は方寸の裏にありて十萬億を心外と想ふや。若し爾らば汝が心は實にせまきものなり。只肉團の裏にありと想ふや。若しかの法界中に無數の刹土あることを疑ふや。若し爾らば法界に邊際ありと思ふや。若し法界かぎりあらば虚空の表如何なるものぞ。虚空無邊際なれば刹海何ぞ數量すべけんや。

法種を薰發

薰發。法はみだの御心 本願の名號。

宗體を定めしむる法を所被の機の腦中に薰習せしめ、よく心の宮に納りたるのち、方便を以て所受の法を開發せしむ。

所歸のあみだ佛、所求の淨土の莊嚴をきつて、ころに知り、後一心に念佛して薰修久して心開發してかの所念の境と相應して證得すべし。經によりて文を薰習せしめ義を開發し信を立て行を修し證を得。

自己生得の大心性は無限の徳を有すれども法界の諸縁にふれて薰習の修徳によらざれば性徳も顯すこと能はず。

自己の心性には有爲無爲の法を受得て發育すべきの性本因ありと雖も之を開き之を示し悟入すること能はず。之を一大事の因所發縁所受と云ふ。本衆生性本因ありと雖も増上縁なき時は開發して無上覺を證する能はず。

若し自己にのみあり他の勝縁にあつからずして大覺を證するならば、凡夫の妄見外道小乘の機類も誰か佛性なきものあらん。然るに彼らが邪見偏見に入つて圓滿に正覺を證せざるは是全く大因縁のかけたるにあらずや。

禪は宗教と云ふよりは心の鍛鍊術と云ふか適當なるべし。

一心が彼の所念の阿彌陀大光王を念すれば、勇猛精進金剛の如くなれば、終に能所一となる是を三昧と云ふ。又盡十方法界は彼の所照の境なれば亦其境内も亦我にあたふ。

一心に念すれば、能照の彌陀所照の我中に入る故内證法界照す、つひに外にあらはる。元祖の頭光亦闇夜の光明彌陀よりうけたるにあらずや。

心の廣さも色界の大を以て顯さざればあらはれず。心體本大小の差を離るゝが故に、淨教の徒雜小經をよみ習ひ謂らく十萬億土の彼に淨土あり六方各恒沙の佛土ありみだ佛大光明十方を照し、六方各光明重々に無盡と、漠然とは云ながら心の範圍の中に納む思想理想界甚廣きにあらずや。小僧は之を自心の範圍内なり、あゝ自心の區域廣いかなと云はざれども、自ら其の區域の無邊をなせり。禪の小僧が、十萬億土なると云やうなそんな外に大きなことがあるものか、何も皆胸の中なりと理想を畫く。其思想の中と乙との區域分齊大海と一滯とにあらずや。あゝ聖教の我らに理想をあたふこと廣大なるにあらずや。

見よ昔の人には博識の人なりと云とも世界は唐日本天竺にかぎれりと、今の地球儀を常に見て居る少年の思想の範圍にも及ばぬ。禪の六祖の如の大修行者も聖教に接せざれば心界は唯廣きものだらうと謂つても物界の十萬億なんと云ふやうな、とひやうもない大きいものとは想はなんだ。夫故聖經によつて思想をいやく小僧にも心の範圍は及ばない。

座をかまへ、一心大勇猛精進力を以てしもくを以て鉦をうつ。其しんにうちこむ。此高聲の口稱は一聲々々悉く十方法界に響き渡りて到らざる處なし。何を以ての故に。此心十方に遍滿するが故に。心遍する故に聲も亦遍。聲遍するが故に眼亦遍す。

問。彌陀經に(此心を離れて淨土なし)、何ぞ十萬億土と云ふや。

答て曰く、色界の十萬億土及六方恒沙各於其國を以て心界の無邊なることを知らしむ。

若し單空心内の淨土と云つて十萬億土を説かずんば、たゞ心は方寸の中と想ふへし。何ぞ夫れせまきや。佛彌陀經を説て我々が心界の無邊なる色界の微塵國土を容るゝことを知らしむ。

問。心淨ければ土淨し。何ぞ外莊嚴を説くや。

答て。汝は淨とは但空と想ふや。但空に何ぞ淨不淨あらん。今淨と云は不淨に對す。

若し淨土の無盡の莊嚴を顯すにあらずんば、いかでか心具の清淨なることを知らん。

あゝ大乘圓滿の修多羅無盡の佛及刹土と無盡の妙色莊嚴を説て我々が心界の無盡をあらはす。かの小乗の但眞、外道の邪空、凡夫の妄空の比ならんや。

常に彌陀經によりて自己の心海内無盡の刹を攝容することを知るのみならず、我心常に此中に逍遙す。是經の恩にあらずや。

○

一心不亂に行住坐臥盤踞痴人の如く作意觀察して念々不捨にし猶一心金剛の如く勇猛精進なる時は三昧發得して妙境と相應すべし。

腦中に能心彌陀佛をさしはさみ、所念の境に念々力を用うれば腦脈横斷して所縁と相應す。是を念佛三昧と云ふ。若成就する時は身穢土にありて心常に淨境に入り三昧無爲即涅槃。斯の如くは單空をたつとぶ離繫のたぐひのうかゞひする所にあらず。無塵法界 恒沙功德 寂用湛然。

○

一心に念佛して腦脈已に分るれば全體露出す。雲はれ霧拂つて富岳雲中より露現するが如し。無始の闇はれて人界の妄執はれて淨土瑠璃の光界に入る。清淨なる靈界肉

眼心の妄境に比に非らず。金山の麗日清淨の天に在り。心境已を忘れて不可思議なり。あみだ佛と心を西にうつせみの

もぬけはてたる聲ぞす、しき

仰て盡虚空徧法界に慈悲と智慧との光を以て充たしめたまふわれらの救主彌陀神尊を崇め、

伏して此忍士に應身を現して悲智圓滿せし教主釋迦牟尼の教を信順す。三心具徳の窓の前には無上功德の月光をまし、寂莫無人の扉の内には五〇〇の風調べを添ふ。

○

念佛の行者一心金剛の如く勇猛精進なること不動明王の如くなるべし。腦裡に一物もおかず。能歸の心所歸あみだ佛の眞金色回光徹照するを執持し、一心不亂に腦裡に充ち力眼晴を製、眼晴の聖電するは能歸の心が所歸のあみだ佛に投する一心の發現、頭に光明を發する尊體は所歸の佛が能歸の腦裡に映現するすがた、能歸所歸性空寂、感應道交難思議、故我頂禮彌陀尊、

一心金剛の如頭に力ありウント氣を丹田としりにすへたること大磐石の如く、勇猛の力用は右手のしもくに現す、卜傳が劔を執るも比にあらず、左の手の數珠の念々不捨離は臂のこぶしに現す。兩足の構ひかたは荒木が較にあらず。

業事成辨は稱名の聲に發し發得の力はしもくの上に見ゆ。

一聲稱名十方に徧し一一〇〇三際に徹す。一捶摧破嚙劫夢。一捶兩斷二十五有。有頂より無間底まで

(註—廿一頁は圖に證したるものなり、圖は彼方には如來尊容ありて、此方に行者の坐形あり、頭上に如來小尊容を頂き右手に鉢を打つ撞木を掲げ左手に珠數を取る臂脚丹田の相は文の如し。)

- 一、腦の體とは本來法爾として自然のまゝ、初未た漠然として茫々冥々たり鑛の如く琢磨によつて光をなす。
- 二、其生得量分段あるべしと云へども、已に受得たる全體をして極度にいたるまで修すべし。性本無限の性徳ありと云へども、畢生の力をつくして自ら充すべし。
- 三、因性ありといへども助縁を藉らざれば磨くこと能はざるものなれば、これを發育せしむる善知識は最も難遇の想をなすべし。
- 四、記憶の如くは腦裡に外縁を薰せしむるもの。
- 五、解説の如くは發解する縁なり。
- 六、多記多解なるも一境によつて深く心を用うるにあらざれば、腦脈を深く分解せしむることあたはず。
- 七、深く工夫を用て一旦豁然として貫通するは腦脈分解して内因心と外縁境と相應したる處なり。
- 一、腦漿澄わたりて腦脈判然として決抉し、内因空、外縁空にして、十方洞然として内外交徹靈明なり。
- 二、自性清淨なりと自性の外に外境なきが如しと謂ふべけれども、よくくわけてみる時は内聚のすみわたたりたる時に、外みな空なりと、凝然たる心相にして若明かに内外を分別する時は内淨外空。
- 三、譬は澄たゝへたる水の中に大虛をうつす如し交徹して靈明なり。澄る水に青天のうつりたるをよく觀じてしるべし。
- 四、因の空に力つよくして縁を奪たる分なり。

- 五、離繫師か一切の約束を離れて眞正解脱の地と謂ふは、彼祖微細なる明了なる學理の研究より成立たるにあらざれば、能觀所觀の差別を知らず初よりたゞ一枚板と謂へり。
- 六、假令能所不二の境に入てもよくくしらふれば能心空境所縁空の等持定の分齊なり。
- 七、彼は能所の分さへしらず、何に況んや諸の三昧門の微妙不可思議の妙境界をや。
- 一、腦漿澄清せる裡に法によつて法身とは法によりて作すが故に法身と云無相法身には非ざるの相好微妙端正にして無比なる所縁の境を、澄淨せる腦の勝義根に模倣して空中に向ふ時は、心界の空中に端正無比なる應身を影現すべし。
- 二、彌陀身心遍法界、映現衆生心想中。
- 三、譬は幻燈因の(はりの)鏡縁ばかりなれば、たゞ大圓鏡の如く。
- 四、若影像をうつせば彼に其影像の映現するが如し。
- 五、腦識に海印の圖を挿めば、華嚴藏等の諸の三昧門は腦識の鏡に諸の影像の板をかへるが如し。
- 六、十三觀は影像の材糧をはめ替るなり。
- 七、腦漿澄淨、腦脈決抉して徹照するは定力成就するによる。
- 九、影像は巧慧の所成なり。微妙の思、審美の想は挿む影像なり。
- 一、因獨り成らず必ず縁をかるべし。
- 二、本因は法爾因縁皆然るまゝを澄しめて、因を以て縁を奪て(何もなき藥を以て夫に相應せしめたる境に縁する)。
- 三、因の體量大小ありと雖も其分を究めつくせるを到彼岸と云修行成就せる也。
- 四、大悟十八變小悟數を知らずとは、可なりに腦脈の決斷せる因が所縁に對して因縁相稱ふたことたゞくなり。

五、幼年の腦裡に不可思議的の神聖を敬畏せる縁を以て素養すれば、腦裡に神聖を仰く腦量を増長す。

盡十方無碍光の覺者色光心光との神。

清淨光、智慧光、超日月光との光を以て覺せる神は、

自性清淨自性と云ふとも己の小分の腦よりみれば所縁の如し。

上の如くの分を多量に含める腦は人中の神聖なるものなり、希有なり、上々人なり

蓮華の如しと。

縁を以て因をたすくれば薰習して、串習は因縁相成て竟に性となるべし。

六、腦裡上の如く薰習ある時は後勝縁に遇ふの日歡迎して腦中に神尊を請じ上るべし

七、小天地なる人體中に靈妙なる神識ありて充てり、

大天地の體中亦た大なる神智なくんば有るべからず。

應身にして人佛故に釋尊は小天地の中の大覺者なり。報土にして報佛の故に彌陀は

大天地の中の大覺者なり、

我らは小天地にして性を有せる未覺者なり。大天地の大覺者となる性を有せり。

昭和九年二月二十五日 印刷
 昭和九年三月二十八日 發行

編輯兼 山崎 辨成
 發行人 小石川區關口町六十五番地
 印刷人 小林 七太郎
 印刷所 小石川區關口町六十五番地
 印刷所 靜文社印刷所
 電話牛込五四一九番

東京市小石川區水道橋二丁目四十四番地
 ミオヤのひかり社
 振替口座東京六八五一番

(誌代年壹圓)